

英語史の授業における古英語の講読例  
—— 449年のアングロサクソン人のブリテン島侵略 ——

野村 忠央

欧米言語文化学会30周年記念出版  
『多次元のトピカ』掲載論文抜刷  
2021年12月31日発行

# 英語史の授業における古英語の講読例

## ——449年のアングロサクソン人のブリテン島侵略——

野村 忠央

### 1. はじめに

筆者は「学問的知見を英語教育に活かす」ことを目的として執筆された野村(2019)において、英語教員や英語教職課程を履修している大学生と英語史、英語音声学の関係について、以下のように述べた。

- (1) さて、読者のみなさんには、本節が英語史 (History of English) と密接に関わることが多くあったのにお気付きではないでしょうか。本書の第10章でも論じられているように英語史の知見は英語教育において非常に重要なヒントや謎解きを提供してくれます。また、第16章では英語音声学 (English Phonetics) から得られた知見について論じられています。現在、多くの大学のカリキュラムにおいて、英語教員免許を取得するためには、英語学概論 (かそれに相当する科目) のみを履修すればいいことになっています。しかしながら、筆者(野村 2013: 76, 注 15) は「中高の英語教員免許を目指している学生にとって、英語音声学と英語史の知識は非常に有益でぜひ学ぶべきだと思う」と指摘した通り、英語教員を希望している学生や英語教員の方々にはぜひこの2つの分野を学んで頂きたいと考えています。英語音声学のプロになればか古英語や中英語がスラスラ読めるようになるべきだとか言っているのでは決してありません。その概説的な知見が必ずや英語授業に活かせることがあるということを申し上げたいということです。(野村 2019: 151)

筆者は英語教職課程を履修する学生が履修できる専門科目として何度か英語史の授業を担当してきたが、その際、(1)の信念に基づき、英語史の概説を教えた後は、外面史、内面史を詳細に教えることは避け、現代英語の理解、英語教育へのヒントという観点から英語史を教えてきた。すなわち、英語の系統(比較歴史言語学の端緒、グリムの法則)、大母音推移 (Great Vowel Shift)、名詞の不規則複数 (ウムラウト (Umlaut))、動詞の規則変化・不規則変化 (強変化と弱

変化、母音交替 (Ablaut, Gradation)), 現代の人称代名詞、冠詞、疑問詞、関係代名詞、不定詞、動名詞、進行形の起源、及び屈折 (動詞の活用、名詞・形容詞・決定詞の曲用、格形式) の衰退と語順の確立、などの観点から英語史を扱い、詳細な通史やテキスト講読はしないということである (その余裕がないという方が正確な記述かもしれない)。日本における古英語・中英語の古典的教科書の一つである市河・松浪 (1986) の序文でも現代英語の理解に資する英語史研究の立場が述べられている。

- (2) わたくしは日本人としてはどこまでも現代英語の研究に重きをおくべきであり、古代及び中世英語の研究は労多くして効少ないものであると信ずる者であるが、しかし学問的立場においては古い時代の英語の正確な基礎的研究は必要なものであるから、出来るだけ一般の英語研究者にも参考になるように書いたつもりである。

(市河・松浪 1986: vi, 原文は市河 (1955)<sup>1</sup> の序文)

筆者が野村 (2019) で挙げた下記の書籍も英語学習の疑問に英語史的な立場から答えてくれる教科書として挙げたものである。

- (3) 参考文献は枚挙に暇がないのですが、英語教育に役立つ、あるいは英語学習の疑問を英語史的な立場から答えてくれる書籍としては遠藤 (1992)、保坂 (2014)、堀田 (2016)、岸田・他 (2018) などが推薦できます。<sup>2</sup>

(野村 2019: 151)

言うまでもなく、英文科の専門科目、英語史を専門に志す者にとっては通史や文献講読は不可欠である。通史の教科書としては枚挙に暇がないが、例えば、Bradley (1904, 1968<sup>3</sup>) (寺澤訳 (1982)), Mossé (1947) (郡司・岡田訳 (1963)), Baugh and Cable (1951, 2013<sup>6</sup>) (永嶋他訳 (1981) = 原著第3版 (1978年) の翻訳), Wilkinson (1977), 松浪編 (1986), 中尾・寺島 (1988), 児馬 (1990, 2018<sup>2</sup>),<sup>3</sup> 宇賀治 (2000), 安藤 (2002), 寺澤 (2008), 片見他編 (2018) などが挙げられる。

そして、文献講読についてであるが、上述の如く、筆者は英語史の授業において文献講読に時間を多く割くことができないのが実情である。しかし、古英語、中英語の原文に全く触れさせないのも決して望ましくないと考ええる。この点、安井・久保田 (2014) の記述は傾聴に値する。

- (4) が、考えてみれば、最もよく英語の変化、歴史を知る方法は、実は、英語史を読むことではなく、古い時代のテキストを読むことである。英語史と銘打ったいかなる書も、ただ、生きた英語の変化、英語の歴史の案内役を果たすにすぎない。したがって、英語史のみを読んでいる人々は、英語の歴史はわからない、というのは単なるパラドクスではない。<sup>4</sup> という意味で、本書により、読者が英語に歴史的興味をもたれ、古い時代のテキストに親しみ、あるいは進んでその研究に従事される糸口でも与えられるということになれば、筆者の望みは十分に達せられたことになる。

(安井・久保田 2014: vi-vii)

以上を踏まえ、本稿では、英語史授業の実践研究として、449年のアングロサクソン人のブリテン島侵略を描いた『アングロサクソン年代記』(*The Anglo-Saxon Chronicle*)の文献講読例——すなわち古英語のテキスト、語句・文法解説、現代英語訳、日本語訳、試験例——を提示したい。本稿の内容が英語史に全く触れたことのない学生に、古英語のさわりに触れさせる一助になればと考える次第である。<sup>5,6</sup>

## 2. 449年のアングロサクソン人のブリテン島侵略についての外面史的背景

古英語文献講読の例としては、古英語期の代表的文学作品である『ベオウルフ』(*Beowulf*)が挙げられることが多いと思われる。例えば、片見他編 (2018)「第I部 古英語」でも『ベオウルフ』に1章が割かれているし (鈴木敬了執筆)、下宮 (1995) もゲルマン語としての英語の紹介の最初に『ベオウルフ』を挙げている。しかし、筆者の経験では『ベオウルフ』は韻文であること、統語法の理解が容易ではないこと、頭韻 (alliteration) やケニング (kenning) などの理解も併せて説明する必要があることなどから初学者には困難があると思われる。<sup>7</sup>

その点、本稿で取り上げる『アングロサクソン年代記』の449年の記述は短く、散文であり、内容や統語法も平易で、<sup>8</sup> また、英語史の始まりを学ぶ外面史としても適していると考ええる。すなわち、英語史の初学者は「古英語は概ね450年<sup>9</sup>～1100年」ということを暗記する訳であるが、その始まりの事件がこの449年のアングロサクソン人のブリテン島侵略である。(終わりの事件が英国史上最大の事件である1066年のノルマン征服 (the Norman Conquest) であることは言うを俟たない。)

筆者は英語史の授業で、次節に示す実際のテキストを読ませる前に、外面史的背景としてよくまとまっている山内・松浪(1986)の記述を読ませることにしている。下記に示すので参照されたい。

- (5) ブリテン島からローマ人を退散させた直接の原因は、ゲルマン民族のローマ侵入であった。これを防ぐために皇帝ホノリウス(Honorius, 384–423)は407年にローマ軍をブリテン島から撤収し始め、次いで410年には、ブリトン人は独力で外敵に当たるようにとの書簡を送り、ここにローマ人のブリテン島支配は終結を告げるようになった。しかし、ブリトン人自身、北方よりピクト人(Picts)およびスコット人(Scots)の攻撃を受け、海上からはサクソン人(Saxons)の脅威をこうむり、文字通り四面楚歌の状態になった。(山内・松浪 1986: 8)
- (6) アングロサクソン人のブリテン島侵略は、すでにローマ支配の時代から始まっており、ことにサクソン人の海賊は東部および東南部の海岸に出没したため、この地方はサクソン海岸(Litus Saxonicum)と呼ばれていた。これらのサクソン人の海賊や北方のピクト人、スコット人を防ぐために、時のブリトン人の王ヴォーティガン(Vortigern)は、大陸のゲルマン人に援軍を求めた。Bede(673?–735)の『イギリス国民教会史』(*Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*)<sup>10</sup>によれば、ヘンジェスト(Hengest)とホルサ(Horsa)が率いるジュート人(Jutes)の援軍がブリテン島に到着したのは449年のことである。しかし彼らはブリトン人を裏切り、アングロサクソン人のブリテン征服の口火を切った。その後、477年から何回かにわたってサクソン人の移住があったが、結局ブリトン人の運命を最終的に決めたのは、その後に大挙して押し寄せたアングル人(Angles)であった。後に中英語のロマンス文学の中心人物として有名になったKing Arthurを始め、ブリトン人の必死の抵抗にもかかわらず、結局コーンウォール、ウェールズ、カンバランド、スコットランドの高地地方を除くブリテン島の大半が、アングロサクソン人の掌中に帰した。(ibid.: 9)

### 3. 『アングロサクソン年代記』の449年の記述のテキスト、語句・文法解説、現代英語訳、日本語訳

本稿の主眼は本節であり、筆者は学生にも本節の内容を実際に教授すると考えられたい。まず、『アングロサクソン年代記』とはアルフレッド大王(King Alfred the Great, 849–99)の命により編纂され、紀元1世紀のローマ帝国襲来から1154年までのイギリスの歴史が古英語の散文で描かれている重要な歴史書である。その449年が記述されたテキストを(7)に示す。テキストはSweet(1882, 1953<sup>9</sup>) (リプリント版、東浦義雄註(1990)<sup>11</sup>)による。Sweetにはテキストについていわゆる『パーカー写本』(*The Parker Chronicle*)を底本としたことが記されている((8)参照)。

- (7) Anno 449. Hēr Martiānus and Valentīnus on-fēngon rīce, and rīcsodon seofon winter. And on hiera dagum Hengest and Horsa, fram Wyr̄tgeome ġe-lapode, Bretta cyninge, ġe-sōhton Bretene on þæm stede þe is ġe-nemned Ypwines-flēot, ærest Brettum tō fultume, ac hīe eft on hīe fuhton. (Sweet 1953<sup>9</sup>: 73)
- (8) The text is based on the Parker manuscript, ed. Plummer and Earle, *Two of the Saxon Chronicles Parallel* (Oxford, 1892). For a discussion of the early entries see F. M. Stenton, *Anglo-Saxon England* (Oxford 1943), pp. 15 ff. (ibid.: 99)

以下、それぞれの文に現れる語句・文法解説をしていく。本節の記述に際しては、上記、Sweet(1953<sup>9</sup>)のグロッサリー(Glossary)、注(Notes)及び古英語辞書Hall and Meritt(1960<sup>4</sup>)を参考にした。<sup>12</sup> 文法解説など、それ以外の記述は筆者の見解である。

まず、第1文のAnno 449.についてである。

- (9) Anno ラテン語 annus の奪格(Ablative Case)。「～年に」の意。現代英語の英単語の anniversary, annual などは関連語である。なお、世界史で紀元前、紀元後の意で用いられる B. C. 及び A. D. はそれぞれ Before Christ, Anno Domini (= in the year of our lord = 主の年に) の省略である。

- (10) 449 数詞。古英語（以下、OE）の綴りで記すと、feower hund nigon and feowertig。OEではゲルマン語の伝統に従い、「400と9+40」という表現をする。今でもドイツ語の数字はvierhundertneunundvierzig (vierhundert neun und vierzig)のようにOEと同様の表現をする。

次に、Hēr ~ winter. までの第2文についてである。

- (11) Hēr 副詞、現代英語の here に相当。Sweet (1953<sup>9</sup>: 99) の注では Hēr is the usual opening of each annual. It means 'at this point in the series', so virtually 'at this date'. と記されている。つまり、ここでは「この年に」の意。
- (12) Martiānus and Valentīnus 名詞、ラテン語読みではマウリキウスとウァレンティヌス。ローマ皇帝の名前。
- (13) on-fēngon 強変化第7類の動詞 on-fon の過去複数形 (preterit plural, 英語史では past の意で preterit という用語がよく用いられる)。与格支配の動詞で receive の意。OEには現在の不規則動詞に相当する強変化動詞が7種類、現在の規則変化動詞に相当する弱変化動詞が3種類あった。

そして、動詞や前置詞の目的語に名詞の格を変化させて後続させることを「支配する」(govern)と呼ぶ。仮に現代英語の take care of him を例とすると、「of は目的格支配の前置詞」ということになる。

また、OEの名詞には4つの格があった。すなわち、「～が」を表す主格 (Nominative Case), 「～の」を表す属格 (Genitive Case), 「～に」を表す与格 (Dative Case), 「～を」を表す対格 (Accusative Case) である。(以降、N, G, D, A でそれぞれ表す。) 現代英語では、所有格 (Possessive Case) が属格、目的格 (Objective Case) が対格と与格に相当する。より正確に言えば、二重目的語構文 S + V + ID + DO の間接目的語の表す格が与格、直接目的語の表す格が対格である。わかりやすさのために、3人称男性人称代名詞の he を用いると、OEでは以下の変化をしていた。

- a. OEの3人称男性人称代名詞 hē 'he' の格変化  
N hē G his D him A hine

つまり、現在もこの格形式が仮に残っていたとしたら、I gave him a book. は「彼に」なので him になるが、「彼を」の時は I love hine. (OEなら Ic lufie hine.) のように hine となるということである。格融合 (syncretism) は英語の歴史の大きな特徴の一つである。なお、(13a) で示した通り、伝統文法や語学的な文脈では、(13b) の現代ドイツ語の文法書同様、N, G, D, A の順で並べるが (ドイツ語文法では伝統的に1格, 2格, 3格, 4格と呼ばれる), 言語学的な文脈では (13c) のように、N, A, G, D の順で並べることも多いので初学者には注意が必要である。

b. 現代ドイツ語の ich. 'I' の格変化

N ich G meiner D mir A mich

c. N hē A hine G his D him

(13c) のような順序からは、「主格と対格、属格と与格は似ている、あるいは同形である」という感覚を掴んで欲しい ((例) scip (N) - scip (A) (船), suna (G) - suna (D) (息子))。

- (14) rīce 中性名詞, kingdom; kinship, sovereignty, rule の意。ドイツ語の Reich (国), ラテン語の rex (王) も参照のこと。OEでは、フランス語やドイツ語など現代の多くのヨーロッパの言語同様、名詞に男性、女性、中性の文法性 (grammatical gender) があつた。つまり、現代英語では無生物名詞は全て it あるいは they で受けるが、仮に現代英語に文法性が残っていたとしたら、その名詞が無生物であっても男性名詞なら he, 女性名詞なら she で受けるということである。

なお、(13) の通り、動詞 on-fēngon は与格支配であり、中性名詞であれば -e の語尾が付くはずなのであるが、rice は -e で終わっている名詞であるため、更に -e が付かなかったと考えられる。

- (15) rīcsodon 弱変化動詞第2類 rīcsian の過去複数形。rule, govern の意。
- (16) seofon 数詞 (numeral), seven の意。1~3までは語尾変化するが、4~19は概して無変化。なお、OEにvという綴りはなく、fの綴りを用いても、有声音に挟まれている場合は [v] と発音されていた。類例としては heofon 'heaven', ofer 'over' などがある。
- (17) winter 男性名詞あるいは中性名詞として用いられる winter の複数 (wintru) 対格形。現代英語の winter の意であるが、OEでは年を数える

際に「7つの冬」は「7年間」の意で用いられることが重要である。なお、中性名詞とした場合、短母音の語幹を持つ中性名詞であるから、下記の *scip* 'ship' と同様の格変化を**するはず**である。

- a. 単数 N *scip*  $\emptyset$  G *scipes* D *scipe* A *scip*  $\emptyset$   
 複数 N *scipu* G *scipa* D *scipum* A *scipu*

そうだとすれば、対格なので *winteru*, *wintru* などとなっていていいはずであるが、そうはなっていない点に興味深い（なお、*winteru* の表記は実際には存在しないと考える）。

次に *And* から最後まで第3文について解説する。

- (18) *on* ここでは与格を支配している前置詞。OEの前置詞は現代ドイツ語同様、与格と対格を支配する場合がある。概ね、静的か動的の違いで、*in* と *into* のような使い分けと考えればよい。現代人の感覚だと *in their days* のように *in* となるはずであるが、*on* となっているのは方言の問題だと考えられる（OEの標準語である West Saxon 方言と現代英語につながる Anglia 方言）。
- (19) *hiera* 3人称複数代名詞 *hīe* の属格形、*their* の意。なお、*they* は英語の本来語ではなくデーン人（ヴァイキング）(*Danes*, *Vikings*) の言語たる古ノルド語 (*Old Norse*) の借入語である。機能語が借入されるのは極めて稀なケースである。OEの3人称代名詞は全て *h-* 形であることに注意。
- a. 3人称男性代名詞 'he' N *hē* G *his* D *him* A *hine*  
 b. 3人称女性代名詞 'she' N *hēo* G *hiera* D *hiera* A *hīe*  
 c. 3人称中性代名詞 'it' N *hit* G *his* D *him* A *hit*  
 d. 3人称複数代名詞 'they' N *hīe* G *hiera* D *him* A *hīe*
- (20) *dagum* 強変化男性名詞 *dæg* の複数与格形、*days* の意。*cnihht* 'boy' などと同様の格変化だが、現代語の語形につながる前舌化あるいは前母音 (*fronting*) が起こっていることが特徴的である。

- 単数形 N *dæg* G *dæges* D *dæge* A *dæg*  
 複数形 N *dagas* G *daga* D *dagum* A *dagas*

- (21) *Hengest and Horsa* この文の主語。名詞、ヘンゲストとホルサ、ジュート人の傭兵の族長、兄弟。どちらの名前も馬を意味するとされる。なお、ヘンゲストはヘンギスト (*Hengist*) の綴りもある。
- なお、アングロサクソン人 (*Anglo-Saxons*) とは現在のデンマーク、オランダ、ドイツの北部海岸地帯に住んでいたアングル人 (*Angles*)、サクソン人 (*Saxons*)、ジュート人 (*Jutes*)、フリジア人 (*Frisians*) の4民族の総称のことである。彼らが5~6世紀にブリテン島南東部に渡来して先住民のケルト民族 (*Celts*) たるブリトン人 (*Britons*) を駆逐したことも「ゲルマン民族 (*Germanic Peoples*) の大移動」の一環である。
- (22) *fram* 与格支配の前置詞、現代語の *from* に相当するが、ここでは受動態を導く *by* の意。現代英語では受動態の動作主を表すのに専ら *by* を用いるが、古い英語では *of* (cf. ドイツ語の *von*)、*with*、*from*、*at* などとも使用されていた。例えば、*be afraid of* ~ は現代では形容詞とされるが、本来は中英語期にフランス語から入った *affray* (おびえさせる) の受動態が起源で、後続する *of* は動作主を表す前置詞の名残である。
- (23) *Wyr̥tgeorne* 固有名詞、古英語の発音ではウィルトイェオルン。Sweet (1953<sup>9</sup>: 99) の注には *Wyr̥tgeorne is the regular development of an earlier O.E. \*Wurtigern adapted from the British Uortigern.* とある。英国史的にはヴォーティガン (*Vortigern*) の名で知られている ((6) 参照)、ブリテン島南東部を支配していたブリトン人の首長。*fram* の目的語であるため与格語尾の *-e* が付いている。
- (24) *ge-lapode* 弱変化動詞第2類 (*ge-*)*lapian* の過去分詞形、*invited* の意。OEはドイツ語の *finden* 'find'-*fand*-*gefunden* のように動詞に *ge* を付けて過去分詞を作る場合が多い。(但し、この *ge* の有無については要注意。すなわち、Sweet (1953<sup>9</sup>: 117) はグロッサリーで、*ge-lapian* としていて、*ge-lapian* としていない。これは、*lapian* と *ge-lapian* の両形を前提としているもの考えられる。査読委員の一人のご指摘に感謝したい。)
- この *ge-lapode* の働きは現代英語で言えば、いわゆる過去分詞の形容詞的用法であるが、過去分詞はそれが限定する名詞の性・数・格に

よって変化するため、-eがついている。つまり、-eは男性名詞・複数・主格の語尾と考えられる。

なお、現代英語の I have caught fish. (私は魚を釣ったところだ) という完了形の起源が I have fish caught. (私は釣られた魚を結果として持っている) であることを習うと思うが、その証拠はそれに対応する OE の文を見ればはっきりする (岸田他 (2018), 嶋崎 (2019) なども参照のこと)。

Ic habbe þone fisc gefangenne.

I have the fish caught

すなわち、gefangenne は「～を捕える」を意味する fon の過去分詞形 gefangen に更に -ne という語尾がついているわけだが、これは男性名詞・単数・対格の語尾であり、それが限定している男性名詞・単数・対格の þone fisc と一致しているということである。

- (25) Bretta 男性複数名詞 Brettas の属格形, British (Celts) の意。  
 (26) cyninge 男性単数名詞 cyning の与格形, king の意。fram に支配されている Wyrðgeorne と同格, よって同様の与格語尾 -e がついている。  
 (27) ge-sōhton この文全体の述語動詞。弱変化動詞第 1 類 sēcan の過去複数形, 対格支配。現代英語の seek に相当する (重要な) 動詞だが、ここでは visit, come to の意。  
 (28) Bretene 女性名詞 Breten の対格形, -e は対格語尾, Britain の意。

なお、中学校で英語を習うと、England がイギリスの国名に相当すると考えてしまいがちだが、イギリス本土全体を指す呼称は Britain が正しい (正式な国名は「グレートブリテン及び北部アイルランド連合王国」)。そして、この文章が描かれている時代に England, English は存在しない。すなわち、このジュート人の侵略の後に大挙して押し寄せてくるアングル人 (Angles) の土地が Englalund, 彼らの言葉が Englisc であり、それが現代英語の England, English の語源である。なお、ローマ教皇グレゴリー 1 世が金髪の非常に肌の白い奴隷に出身地を尋ね、「アングルです」と答えたところ、「お前は Angle (アングル人) ではなく angel (天使) のようだ」と言ったことは有名な逸話である。

- (29) þæm 男性あるいは中性与格定冠詞, the の意。OE の定冠詞の体系は

以下の通り。現代英語の定冠詞 the は男性単数定冠詞の sē, se に由来、また、指示代名詞の that は中性単数定冠詞の þæt に由来している。表の I は「～で」の意を表す (道) 具格 (Instrumental Case) のこと。定冠詞の具格 þy は The sooner, the better. の関係副詞, 指示副詞, nonetheless, nevertheless などの語に残っている。

男性単数定冠詞	N sē, se	G þæs	D þæm	A þone	I þy, þon
女性単数定冠詞	N sēo	G þære	D þære	A þā	(I þæs)
中性単数定冠詞	N þæt	G þæs	D þæm	A þæt	I þy, þon
複数定冠詞	N þā	G þara	D þæm	A þā	

- (30) stede 男性名詞 (あるいは中性名詞) 与格, place の意。与格であることは定冠詞 þæm からわかる。なお、この単語は現代では廃用化したが、その痕跡は複合前置詞の instead of ~に残っている。この stead の原義が place の意であることは、同意表現の in place of ~からも窺える。  
 (31) þe 古英語の無標の関係代名詞, 格による変化をしない。なお、現代英語では指示代名詞系の that と who, which などの疑問詞形の関係代名詞が共存しているが、先に出現したのは that の方で、疑問詞形の関係代名詞の出現は中英語期である。なお、関係代名詞 that の起源は (29) で示した古英語の中性単数定冠詞 þæt である (嶋崎 (2019) など参照)。  
 (32) ge-nemned 弱変化動詞第 1 類 nemnan 過去分詞形, is と共に受動態を形成, is named, is called の意。  
 (33) Ypwines-flēot 固有名詞, 地名, 古英語の発音はイプウィネスフレオト。Sweet (1953<sup>2</sup>: 99) の注には Ypwines-fleot is apparently Ebbsfleet in Thanet. とある。つまり、現在のエプスフリートである。  
 (34) ærest 副詞, 「はやく」の意の ær に最上級の語尾 -est がついたもの, (at) first の意。  
 (35) tō 現代英語の to に相当する前置詞であるが、Sweet (1953<sup>2</sup>: 117) のグロッサリーでは to の一般的な意味の後に, purpose, destination, for, as, towards と記してある方の意味であり、下記 (44) の現代英語訳では to help the Britons となっているが、古英語に即した直訳は as a help to [the] Britons ということになる。  
 (36) fultume 男性名詞 fultum の単数与格形, -e は与格語尾, help, forces,

troopsなどの意を表すがここでは「助け」の意。

- (37) Brettum 男性名詞 Brettaの複数与格形, Britonsの意。この与格は「所有の与格」と呼ばれるものである。
- (38) ac 古英語の代表的な接続詞。文脈によって and, but 両方の意になるが、ここでは but の意。
- (39) hīe 3人称複数主格代名詞 ((19)参照)。現代英語の they に相当。ここではヘンゲストとホルサの2人を指している。
- (40) eft 副詞, again, afterwards, then, back などの意を表すがここでは「後に」の意。
- (41) on 方向を表す対格支配の前置詞, ここでは feohtan 'fought' と結び付いて against (〜に対して) の意。
- (42) hīe (39)の hīe と同形だが、こちらは前置詞 on に支配されている3人称複数対格代名詞 ((19)参照)。現代英語の them に相当。ここでは on Brettas (ブリトン人たちに対して) の意。
- (43) fuhton 強変化動詞第3類 ge-feohtan の過去複数形, fight の意。

以上を踏まえ、現代英語訳、日本語訳を提示する。(44)は Sweet (1882, 1953<sup>9</sup>)の注を施した東浦義雄による現代英語訳、(45)は『アングロサクソン年代記』の全訳を著した大沢一雄による日本語訳、(46)は筆者の訳である。

- (44) 449. In this year Mauricius and Valentinian obtained the kingdom and reigned seven years. In their days Hengest and Horsa, invited by Vortigern, king of the Britons, came to Britain at a place which is called Ypwinesfleot at first to help the Britons, but later they fought against them. (東浦註 1990: 208)
- (45) 449年。[この年に、大修道院長エウティケスとディオスコルスに反対して、630名のカルケ会議が開かれた。]この年に、マウリキウスとワレンティネスは王国を受け継ぎ、七年間統治した。そして、彼らの統治時代ブリトン人の王ボーティガンから要請を受けたヘンゲストとホルサは、はじめはブリトン族を援助するためにブリテンのイブイネスフレオトという海岸に上陸したが、後に、彼らはブリトン人とたたかった。(大沢訳 2012: 26)
- (46) (西暦紀元後) 449年、この年に(ローマ皇帝の)マルティアースとヴ

ァレンティースは(ローマ)帝国を継承し、7年間統治した。そして、彼ら二人の統治の間、ブリトン人の王であるヴォーティガンによって(援軍として)招かれたヘンゲストとホルサは、最初はブリトン人を助けるために、ブリテンのイブイネスフレオトと呼ばれる土地にたどり着いたのだが、後に彼ら(二人)は(裏切って)ブリトン人と戦ったのだった。(野村忠央訳)

#### 4. 試験問題例

最後に、3節の内容の試験問題例を(47)に提示する。試験問題にグロスリヤーを付すかどうかは学生の到達度、教授者の判断による。(48)はその解答例である。

- (47) 以下は古英語で記された『アングロサクソン年代記』からの一節である。読んで後の問いにそれぞれ答えなさい。(20点)
- Anno 449. ① Hēr Martiānus and Valentīnus on-fēngon rīce, and rīcsodon seofon winter. And on hiera dagum Hengest and Horsa, fram Wyr̄tgeorne ② ge-lapode, Bretta cyninge, ge-sōhton Bretene on þām stede ③ þe is ge-nemned Ypwines-flēot, ærest Brettum tō fultume, ④ ac hīe eft on hīe fuhton.

問1 下線部①を日本語に訳しなさい。(4点)

問2 下線部②について、ge-lapodeの文中での働きを答えなさい。また、語尾の-eの語形について文法的に説明しなさい。

(各3点×2=6点)

問3 下線部③について、þeの品詞と文中での働きを答えなさい。

(4点)

問4 下線部④に現れる2つのhīeについて、それが指し示すものを本文から抜き出しなさい(格形式は無視して、本文のまま抜き出せばよい)。(各3点×2=6点)

#### (48) 解答例

問1 この年にマルティアースとヴァレンティースは帝国を継承し、7年間統治した。



問2 *ge-lapode* は *invite* を意味する弱変化動詞第2類 *ge-lapian* の過去分詞形であり, *Hengest and Horsa* を修飾する現在分詞の形容詞的用法として働いている。

また, 過去分詞はそれが限定する名詞の性・数・格によって変化するが, この *-e* は, *Hengest and Horsa* が男性名詞・複数・主格であるため, それに一致してついている語尾だと考えられる。

問3 *pe* の品詞は関係代名詞で, 先行詞 *þæm stede* を修飾する形容詞節を導いている。

問4 最初の *hīe* → *Hengest and Horsa* 後の *hīe* → *Brettum*

## 5. おわりに

本稿では英語史の授業における古英語の講読例を提示してきた。3節で説明した古英語はわずか数行のパスセージであるが, 経験上, 英語史に初めて触れる学生に教授する場合は90分授業の1コマを費やすこともしばしばである。

なお, 筆者は4節で20点分の試験問題例を提示したが, 100点満点とした場合の残りの80点分は英語史の概説を全て記号問題で問うている。その理由は, 第1節でも述べたように, 仮に英語史の授業が開講されているとしても, 多くの場合, それは英語史の専門家を養成するための授業ではなく, 現代英語をより良く理解するための手段としての英語史の授業だと考えられているからである。

本稿の内容が現代英語の理解を深めることを目的とする英語史の授業において, 古英語講読の一つのケーススタディとなれば幸いである。<sup>13</sup>

\* 本稿の内容に関し, 有益なコメントをいただいた本学会の2名の査読委員に記して感謝申し上げる。

また, 筆者は, いずれの方ももう20年以上前のことになるが, 英語史, 古英語, 中英語, 近代英語について岸田緑溪(元セント・アンドルーズ大学客員研究員, 元日本中世英語英文学会評議員), 毛利秀高(青山学院大学名誉教授), 山内一芳(東京都立大学名誉教授), Hugh E. Wilkinson(青山学院大学名誉教授), 文法化理論, 初期近代英語について秋元実治(青山学院大学名誉教授), ドイツ語学, ゲルマン語学, 比較歴史言語学について下宮忠雄(学習院大学名誉教授)の各先生方に直接, 間接に学ぶ機会があった。松村一男(和光大学)氏には筆者の和光大学

在職中(2009年)に比較言語学の授業を聴講させて頂いた。筆者は古英語・中英語を主とした文献学の道には進まなかったが, 史的研究における学びが自身の研究の基盤を成していることに疑いはない。これら先生方の学恩に直接に報いることは叶わないが, 本稿の内容が英語学習者や英語教授者にとって何らかの一助となることを願い, ほんのささやかにも学恩の一端に報いることを願うものである。

## 注

1. なお, 市河(1955)『古代中世英語初歩』とその改訂版市河・松浪(1986)『古英語・中英語初歩』の番名が違うが, そのことは学生にも教えるべき事柄である。すなわち, Old EnglishとMiddle Englishは世界史上の時代区分としての古代, 中世と誤解が起こるため, 特に20世紀後半以降, 古英語, 中英語(あるいは古期英語, 中期英語)という名称が用いられるようになったということである。なお, 古英語も中英語も世界史上の時代区分としてはどちらも中世に対応する訳であるが, 両者を併せて中世英語(Mediaeval English)と呼ぶことがあることも注意が必要である。例えば, 日本中世英語英文学会は中世英語を対象とする学会である。
2. 英語史の教科書の性質とは異なっているので野村(2019)では挙げなかったのだが, 中尾・児馬編(1990)も様々な構文の歴史的発達について, より専門的な観点から論じられている優れた研究である。
3. 児馬(1990, 2018<sup>2</sup>)は野村(2019)で(3)の例として含めるか迷ったのであるが(生成文法などの理論言語学の成果を英語史に反映させる試みだと考えられる), 一応, 通史的教科書と考えて含めなかった。ちなみに, 筆者は初版も改訂版も英語史の教科書として使用した経験がある。
4. 余談ながら, 安井(1988)の「チョムスキー読みの英語知らず」という言説はパラレルな言として理論言語学者が心に留めおくべきことである。
5. 言うまでもないことであるが, 英語史を専門として学びたい学生には本稿の内容では全く足りない。しかし, 筆者は学部時代に1年間チャウサー(Geoffrey Chaucer, c1343-1400)の「カンタベリー物語」(*The Canterbury Tales*, c1387-c1400)を講読する英語学演習や, 大学院時代に1年間古英語を講読する古英語研究の授業があったけれども, 今の時代の英文科のカリキュラムで英語史の文献講読を期待するのは困難だと思われる。  
なお, 自学自習できるグロッサリー(glossary)も付いたテキストとしては本稿の底本としているSweet(1882, 1953<sup>3</sup>)などの他, 日本にも長い伝統があり, 例えば, 市河・松浪(1986)や宮部(1974)などが挙げられる。但し, これらのテキストは初学者用に綴りなどが標準化(normalize)されていることに注意すべきである。  
また, 査読委員のお一人より, 古英語に馴染みのない読者のために, 巻末にグロッサリーが付いているテキストの利用を勧めてはどうかという示唆があったが, 全く同感である。初学者は古英語の語彙を調べることに多大な労力が掛かるので, 最初の学習としてはグロッサリーが付いているテキストの利用を勧めたい。
6. 本稿で紹介するテキストに最初に触れたのは恐らく四半世紀以上に学んだ岸田緑溪氏の英語学講義(英語史)であったと思われる。授業内容に感謝したい。

7. もちろん、ゲルマン民族の優れた英雄叙事詩たる『ベオウルフ』の冒頭部分は本文と現代英語訳、日本語訳を提示した上で(刈部・小山編著(2007)、片見他編(2018: 第2章)など参照)、古英語の実際の音声を聞かせた方がよい。
- なお、英語の発展、英語の歴史についての優れた視聴覚教材として1985年にBBCが制作した60分番組 *The Story of English* (全9回)がある。(McCrum *et al.* (1986)として書籍化もされ、岩崎他訳(1989)として日本語訳も出版された。)そして、それをNHKが1988年に45分に縮約、翻訳して放映した『英語についての9章』(元東京都立大学名誉教授 小野茂監修)の第2話は古英語、中英語を扱っており、大変有益である。その中で『ベオウルフ』が実際にどのように演奏されていた(であろう)かが描かれている場面があるので、併せて学生に視聴させることをお勧めする(但し、筆者はあのように早いスピードで『ベオウルフ』が奏でられていたのか疑問に思う部分がある)。
8. 但し、テキストとして通説する場合は、「何年、この年に何があった」という記述が繰り返されるので単調に耐えねばならないこととなる。
9. なお、古英語の時期を文献が存在する700年~1100年として、450年~700年を文献前古英語期(Pre-Old English)とする区分もしばしば見られる区分である。その場合、700年~900年を初期古英語(Early Old English)、900年~1100年を後期古英語(Late Old English)とするのが慣例である。
10. 英訳としては *The Ecclesiastical History of the English People* となる。日本語訳としては高橋訳(2008)がある。作者のベダ・ヴェネラビリス(Beda Venerabilis, 672/ 673-735)は英語の文脈では尊者ビード(Bede the Venerable)と呼ばれることが多い。
11. なお、千城書房は英語学、英語史に関する数多くのリプリント版や書籍(Jespersen (1933)などの翻訳も含む)を安価な値段で出版していた出版社であったが、残念ながら21世紀を迎えることなく廃業した。
12. なお、今回は参考にしていないが、小島(2012)という日本語の古英語辞典が出版されている。余談ながら、ゲルマン語学者・比較言語学者の下宮忠雄氏(私信)も以前、言われていたことであるが、大学書林等を含め、世界各国の言語の入門書や文法書のみならず、古英語や古高ドイツ語など、外国語の古語の文法書や翻訳が、語族が全く異なる日本語によって多数出版されていることは特筆に値する。
13. 仮に同様のことを中英語のテキストで試みる場合は『カンタベリー物語』の総序(プロローグ)を(Chaucer, 市河・松浪注訳(1987)、Chaucer, 刈部他編訳注(2000)参照)、初期近代英語のテキストで試みる場合はシェイクスピア(William Shakespeare, 1564-1616)の有名な作品の一部、あるいは欽定英訳聖書(*Authorized Version, King James Bible*, 1611)などが有益である。シェイクスピアの例としては、野村他(2017: 115-17)の『ロミオとジュリエット』のバルコニーシーンのテキスト、グロッサリー、問題例を参照のこと。
- なお、聖書は「主の祈り」(The Lord's Prayer)などの有名な一節を古英語、中英語、近代英語、現代英語、日本語訳で比較できる点でも大変有益である。
- (i) 古英語(10世紀のWessex方言)  
 Fæder ure þū þe eart on heofonum, sī þīn nama gehālgod. Tō becume þīn rīce. Geweorpe ðīn willa on eorðan swā swā on heofonum. Ūrne dæghwāmlican hlāf syle ūs tō dæg.
- (ii) 中英語(ウイクリフ(John Wycliffe, c1324-84)版聖書)  
 Oure fadir that art in heuene, halewid be thi name. Thi kyngdoom come to.

Be thi wille don in erthe as in heuene. Gyve to us this dai oure breed ouer other substance.

- (iii) 初期近代英語(欽定英訳聖書(1611年))  
 Our father which art in heaven, Hallowed be thy name. Thy kingdom come. Thy will be done, in earth, as it is in heaven. Giue us this day our daily bread.
- (iv) 現代英語  
 Our father in heaven, may your holy name be honoured; may your kingdom come; may your will be done on earth, as it is in heaven. Give us today the food we need. ((i)-(iv): Wilkinson (1977: 23-24) 参照)
- (v) 文語訳(多くのプロテスタント系の賛美歌に掲載されているもの)  
 天にまします我らの父よ。ねがわくは御名をあげたまえ。御国を来たらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。我らの日用の糧を、今日も与えたまえ。
- (vi) 口語訳(新共同訳)  
 天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が行われますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。

## 参考文献

- 安藤貞雄(2002)『英語史入門——現代英文法のルーツを探る』東京：開拓社。
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable (1951, 1978<sup>3</sup>, 2013<sup>6</sup>) *A History of the English Language*. New Jersey: Prentice-Hall, Abingdon: Routledge. (永嶋大典他訳(1981)『英語史』(原著第3版の翻訳)東京：研究社出版。)
- ベダ、高橋博訳(2008)『ベダ英国国民教会史』(講談社学術文庫)東京：講談社。
- Bradley, Henry (1904, 1968<sup>2</sup>) *The Making of English*. Revised by Simeon Potter in 1968. London: Macmillan. (寺澤芳雄訳(1982)『英語発達小史』(岩波文庫背659-1)東京：岩波書店。)
- Chaucer, Geoffrey, 市河三喜・松浪有注訳(1987)『CANTERBURY TALES—GENERAL PROLOGUE』東京：研究社。
- Chaucer, Geoffrey, 刈部恒徳・笹川寿昭・小山良一・田中芳晴編訳注(2000) *A New Invitation to Chaucer's General Prologue*. (原文対訳『カンタベリー物語—総序歌』)東京：松柏社。
- 遠藤幸子(1992)『英語史で答える英語の不思議』東京：南雲堂フェニックス。
- Clark Hall, J. R. and Herbert D. Meritt (1960) *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*. Reprinted in 1993. Toronto: University of Toronto Press.
- 保坂道雄(2014)『文法化する英語』東京：開拓社。
- 堀田隆一(2016)『英語の「なぜ？」に答える はじめての英語史』東京：研究社。
- 市河三喜(1955)『古代中世英語初歩』東京：研究社出版。
- 市河三喜・松浪有(1986)『古英語・中英語初歩』東京：研究社出版。
- Jespersen, Otto (1933) *Essentials of English Grammar*. George Allen & Unwin. (中島文

- 雄訳 (1962) 『英文法エッセンシャルズ』 東京: 千城書房.)
- 片見彰夫・川端朋広・山本史歩子編 (2018) 『英語教師のための英語史』 東京: 開拓社.
- 荻部恒徳・小山良一編著 (2007) 『古英語叙事詩「ベオウルフ」対訳版』 東京: 研究社.
- 岸田緑溪・早坂信・奥村直史 (2018) 『英語の謎 歴史でわかるコトバの疑問』 (角川ソフィア文庫) 東京: KADOKAWA.
- 小島謙一 (2012) 『古英語辞典』 東京: 大学書林.
- 児馬修 (1990, 2018<sup>2</sup>) 『ファンダメンタル英語史 [改訂版]』 東京: ひつじ書房.
- 松浪有編, 秋元実治・河井迪男・外池滋生・松浪有・水鳥喜喬・村上隆太・山内一芳 (1986) 『英語史』 (英語学コース [1]) 東京: 大修館書店.
- McCrum, Robert, Robert McNeil, and William Cran (1986) *The Story of English*. New York: Viking. (岩崎春雄他訳 (1989) 『英語物語』 東京: 文藝春秋.)
- 宮部菊男 (1974) 『中英語テキスト』 東京: 研究社.
- Mossé, Fernand (1947) *Esquisse d'une histoire de la langue anglaise*. Lyon: IAC. (郡司利男・岡田尚訳 (1963) 『英語史概説』 東京: 開文社.)
- 中尾俊夫・児馬修 (1990) 『歴史的にさぐる現代の英文法』 東京: 大修館書店.
- 中尾俊夫・寺島勉子 (1988) 『図説 英語史入門』 東京: 大修館書店.
- 野村忠央 (2013) 『日本の英語学界——現状, 課題, 未来』 『日本英語英文学』 第23号, 55–85.
- 野村忠央 (2019) 『混乱の多い英語学の専門用語, 知っておくべき英語学の専門用語 (1)』 野村他編 (2019), 145–62.
- 野村忠央・永谷万里雄・野村美由紀・勝山裕之・菅野悟 (2017) 『[[改訂新版] 一度は読んでおきたい名文から学ぶ総合英語』 東京: DTP 出版発行, 朝日出版社発売.
- 野村忠央・女鹿喜治・鵜崎敏彦・川崎修一・奥井裕編 (2019) 『学問的知見を英語教育に活かす——理論と実践』 東京: 金星堂.
- 大沢一雄訳 (2012) 『アングロ・サクソン年代記』 東京: 朝日出版社.
- Earle, John and Charles Plummer eds. (1897) *Two of the Saxon Chronicles Parallel*. Oxford: Clarendon Press.
- Stenton, Frank M. (1943) *Anglo-Saxon England*. Oxford: Clarendon Press.
- Sweet, Henry (1882, 1953<sup>2</sup>) *The Anglo-Saxon Primer*. Oxford: Oxford University Press. (リプリント版, 東浦義雄註 (1990) 『古代英語文法入門』 東京: 千城書房.)
- 下宮忠雄 (1995) 『ゲルマン語読本』 東京: 大学書林.
- 寺澤盾 (2008) 『英語の歴史——過去から未来への物語』 (中公新書) 東京: 中央公論新社.
- 鵜崎敏彦 (2019) 『英語史の知見を活かした効果的な発問例』 野村他編 (2019), 132–44.
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』 (現代の英語学シリーズ 8) 東京: 開拓社.
- Wilkinson, Hugh E., 木村建夫解注 (1977) 『英語史入門——The How and Why of English』 東京: 研究社.
- 山内一芳・松浪有 (1986) 『古英語』 松浪有編 (1986), 3–31.
- 安井稔 (1988) 『英語学と英語教育』 (現代の英語学シリーズ 10) 東京: 開拓社.
- 安井稔・久保田正人 (2014) 『知っておきたい英語の歴史』 (開拓社叢書 21) 東京: 開拓社.